タイ王国及び他の東南アジア諸国の経済・産業動向、社会動向報告書

2017 年 9 月

こんにちは。鳥取県東南アジアビューローの辻です。

2017 年 9 月 27 日、日本とタイは修好 130 周年を迎えました。この記念すべき年に、日本とタイの各地で修好 130 周年を祝う記念行事が多数開催されています。今回は近年より親密度を増している、日本とタイの関係についてご紹介します。

【日タイの交流の歴史】

日本とタイの交流は、さかのぼること約 600 年前に始まったとされています。当時、アユタヤ王朝だったタイでは、日本からの御朱印船により貿易が行われていました。アユタヤには日本人町も形成され、最盛期には 1,500 人ほどの日本人が住んでいたと言われています。（アユタヤの日本人町跡は、現在でも観光地として知られています）

その後、アユタヤ王朝内の政局争いに巻き込まれたり、江戸幕府による鎖国令などにより日本人町は衰退してゆき、18 世紀初頭に消滅したとされています。

アユタヤの日本人町跡

18 世紀から 19 世紀にかけての欧米列強によるアジア諸国の植民地政策が進む中、現在の王朝であるラッタナコーシン朝となっていたタイでは、ラマ 5 世の優れた指導力の元で近代化を図りながら独立を保っていました。同じく日本でも明治維新後の近代化が進む中、今から 130 年前の 1887 年（明治 20 年）9 月 27 日、日タイ修好条約により、アジアの中で日本が修好条約を結んだ初めての国として、タイとの国交が正式に結ばれました。

その後、第二次世界大戦終戦後に外交関係が一時的に停止した時期もありましが、戦後も良好な関係を続け、現在に至ります。特にここ数年、日本とタイの文化的・経済的交流は非常に活発になっており、タイ国内の在留邦人の数も 2000 年ごろから徐々に増え始め、2016 年には 7 万人を突破（在タイ日本大使館調べ）しました。また、日本を旅行で訪れるタイ人も、2013 年にビザが免除されたことを契機に年々増加し、2016 年には国・地域別で中国・韓国・台湾・香港についで第 5 位、年間 90 万人を突破（JNTO 調べ）しました。リピーターとして日本を訪れるタイ人観光客も多く、今後も増えていくことが予想されています。

旅行フェアでも日本関連のブースは大人気で、当ビューローが運営をお手伝いしました鳥取県ブースにも大勢のタイ人の方にお越しいただき、「〇〇までのバスの運行時間は？」や「〇〇の休館日は？」などの具体的な質問をたくさんいただきました。

Visit Japan 旅行フェアに出展した鳥取県ブース
ブースを訪れた来場者からは、県内移動についてなど具体的な質問が多数寄せられました

一方、日本でもタイ大使館の主催によるタイの食べ物や文化・伝統を紹介するイベント「タイフェスティバル」が各地で開催され、「タイフェス」の愛称で親しまれています。中でも 5 月に開催される東京・代々木公園でのタイフェスは、今年で 18 回目の開催となり、2 日間で 30 万人以上を動員して、代々木公園に 1 年で最も人が集まるイベントとして人気を博しています。場内では本場のタイ料理、タイビール、タイフルーツが味わえる屋台や、タイ雑貨が並ぶ売店、ムエタイの実演やタイのミュージシャンによるコンサートが行われるステージなど、日本にいながらタイを体感できるイベントとなっています。

タイ料理の屋台はどこも長蛇の列

場内にはトゥクトゥクの展示販売も

※写真はタイ大使館 HP より引用

このようなイベントを通じて、日本とタイ双方による文化交流が盛んに行われることで、今後も日タイの友好関係が一層発展することを期待いたします。

【親密な皇室・王室関係】

日本・タイ両国の関係を語る上で、国民から敬愛を集める皇室・王室間の長く親密な関係は欠かすことのできない重要な点です。天皇皇后両陛下は 1991 年 9 月に即位後初めての海外訪問地としてタイを訪問され、また 2006 年 6 月におこなわれたプミポン国王陛下の即位 60 周年記念式典にご出席されるためにタイを訪問されました。

皇族・王族による交流も盛んで、日本からは秋篠宮御一家をはじめとして多くの皇族方がタイを訪問され、タイからも昭和天皇の大喪の礼や今上陛下の即位の礼に、当時のワチラロンコーン皇太子殿下（現在の国王陛下）がご出席されました。

プラーニン（ティラピア）

皇室とタイを結ぶ有名なエピソードとして「プラー・ニン（ティラピア）」の話があります。1964 年、当時皇太子だった天皇陛下が美智子妃殿下とともにタイをご訪問された際、国民のたんぱく質不足に悩むプミポン国王陛下から相談を受け、繁殖力の強いティラピア 50 匹をタイへ贈られました。その後、プミポン国王陛下は宮殿内の池で飼育を始め、繁殖により何十万匹となったティラピアをタイ全土に配られ、今でも一般的な食用の淡水魚として親しまれています。このエピソードから、タイではティラピアのことを天皇陛下のお名前から「仁」の文字をとり、「プラーニン（仁魚）」と呼ばれるようになりました。